

I 北海道空知管内国際理解教育研究協議会

平成20年度 研究の概要（3年計画 1年次）

【テーマ】

自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く 児童生徒の育成

【サブ・テーマ】

～地球的視野を持ち、共に生きる力を培う学びを求めて～

北海道空知管内国際理解教育研究協議会では、例年の活動において、児童・生徒の「共に生きる力」を培うための授業作りに力点を置いてきた。常に「身近な素材」を出発点とし、「世界」と「自分」をつなぐことで、そこから「地球市民」としての「地球的視野」をもつ児童・生徒が育成されていくことを願い、様々な実践を積み重ねてきた。ただ、活動地区が広く、常日頃から教師同士の交流や研修を積み重ねることがなかなかできないため、年間に数回程度の集まりの中で、海外派遣帰国報告会や日頃の実践の交流、最低1本の公開授業を主たる活動としてきた。そして、様々な実践を年ごとに確かめ合い、同じ目線で研究を積み重ねてきた。

平成20年度、研究の目指すべき方向性を再確認し、実践の集積を継続して行い、3年計画の1年目として、研究授業等を公開するに至った。

広い北海道の中の1つの実践の方向性という提案となったが、児童・生徒の実態に合わせた形で、小学校外国語活動の導入を初めとする教育課程の改訂を視野に入れ、また、昨今の変化に富んだ世界や日本の情勢を踏まえた上での、現状から出発する国際理解教育。研究の広がりの中で、原点であった「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる実践ができるように、点と点を結んだネットワークで、点から線へ、そして、大きな面へとつながっていきえるようになっていければと研究を推進してきた。

1. 研究テーマおよびサブテーマについて

基本的な考え方 ～国際理解教育をなぜ進めていくのか？～

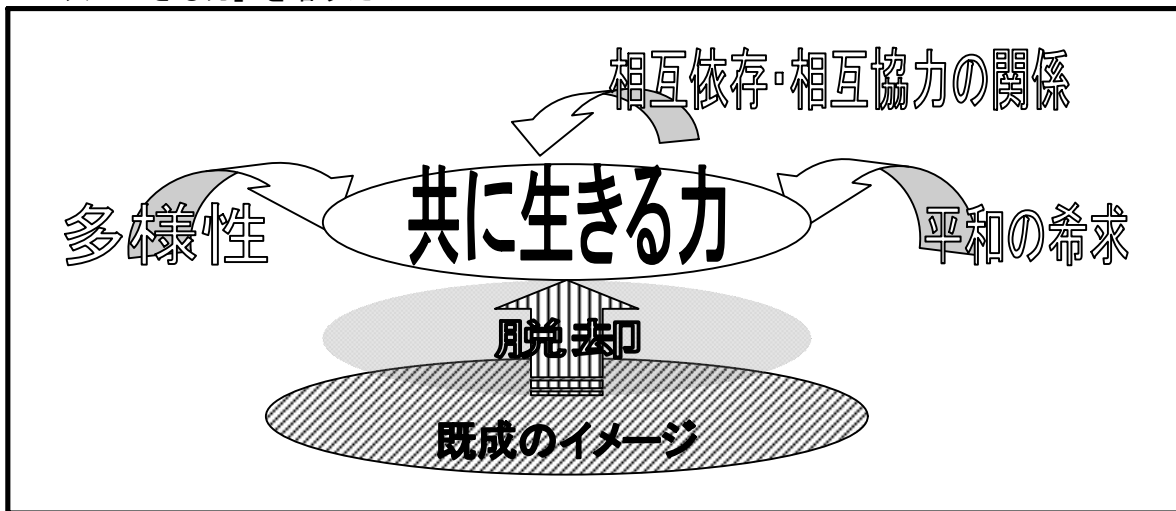
「世界を知ること」が、すなわち、それが「日本を知ること」につながり、それを通して、「自分を含めた周り（取り巻く地域）への理解」へとつながっていく。

周りにある身近な素材を使い、「自分が世界とつながっている」という、地球的な視野を意識的に持たせる、そういう国際理解教育のアプローチが、子どもの自立や共生の意識を高めることにつながっていく。

児童・生徒の取り巻く環境は日々変化している。その中で現れる多様な考えを受け止めていける姿勢や、周りとうまくコミュニケーションする姿勢など、ちょっとしたきっかけで自信につながる経験は、トータルとして子どもの資質や能力を確実に育てていくことができる。これらは生きていく上で、大きな力となるはずである。

<北海道空知管内国際理解教育の「共に生きる力」の考え方>

「共に生きる力」を培うために・・・



【共生とは】

- ・ 生命に対して、畏敬の念を持ち、共に生きていこうとする態度
- ・ 人々の相互依存、相互協力の中で生きていこうとする態度
- ・ 「違い」を違いとして認め、それらの多様性を豊かさとして尊重する態度
- ・ 既にイメージの出来上がっているものについても、自分で考え、さらに異なる見方で理解しようとする態度
- ・ 世界の平和を希求する態度

【共に生きる力】

- ・ 人々の相互依存、相互協力の中で生きていこうとする資質・能力
- ・ 世界の平和を希求する資質・能力
- ・ 違いを認め合い、多様性を豊かさとして尊重する資質・能力
- ・ 既に出来上がったイメージにも異なる見方で、理解する資質・能力

(1) 共生の意識

教育課程審議会答申にあるように、国際化のための教育のねらいは、広い視野で異文化を理解することおよび異なる文化や習慣を持つ人々に偏見を持たず、自然に交流し、共に生きていくための資質や能力を育成することである。

少子高齢化社会への対応の中でも、他人を思いやる気持ちや共に生きていこうとする考えをはぐくむことが大切であるとしている。

つまり、これからの国際理解教育は知識の集積ではなく、命あるものを尊び、共に生きていく態度を養うものでなくてはならない。

また、共生の力を培う上で、「自立」の力があってこそその共生であることを付け加えておく。

(2) 相互依存、相互協力の関係

いまや世界は冷戦の時代を終え、地球全体が自由主義経済圏のひとつとしてのシステムに変わろうとしており、そのシステムの中では、一部分が他の部分に大きな影響を与えているのが現実である。そして、その相互依存の中には、必ずしも相互に恩恵で結ばれているとはいえない不均衡な相互依存も存在する。一国の利益だけを追求できる時代は終わり、これからは相互協力の立場から世界に貢献していくことが求められている。

(3) 多様性の豊かさ

最新の研究によると、様々な生物学的な違い・遺伝的な原因による様々な病気ですらも、遺伝子それ自体が生き延びるための多様性であると言われている。

多様性は生命が生き延びるために大切な戦略といえる。同様に世界における多様な人種や文化・習慣の違いは、人類が行き延びていくための重要な条件である。

(4) 既成のイメージにとらわれない

過去においても現在でも、戦争の大きな要因のひとつとして様々な偏見があげられる。偏見とは、「ある個人や集団に対して、十分に知らないにもかかわらず持つてしまう個人が持つ一方的な態度や意見」と言える。それらの偏見には、身近な家族やマスメディアの影響によることが大きいと言われている。

さらに、偏見の中からある個人や集団に対して過度に一般化された概念、すなわちステレオタイプが導き出される傾向がある。

これからの人間は、自分で考え自分で判断しながら主体的に生きていくこと、そして様々な個人や集団に対して安易なステレオタイプを持つことなく、偏見や差別の生じる背景にも気を配り、広い視野で公正に物事を判断し、多様性についての理解や認識を深めることが大切である。

(5) 平和の希求

国際理解教育はそもそも、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関 1946〔昭和21年〕年設立）が第二次世界大戦後、世界の中で平和の願いがこれまでになく強まったことを受けて、その憲章の前文において、【戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心に平和のとりでを築かねばならない】と宣言し、世界の平和を目指して、「国際理解のための教育（Education for International Understanding）」を各国の重要な教育課題として斉唱したことに始まる。

平和的な国際社会を創るために貢献できる日本人を育成することは、国際理解教育の根本の目標とも言えるものである。

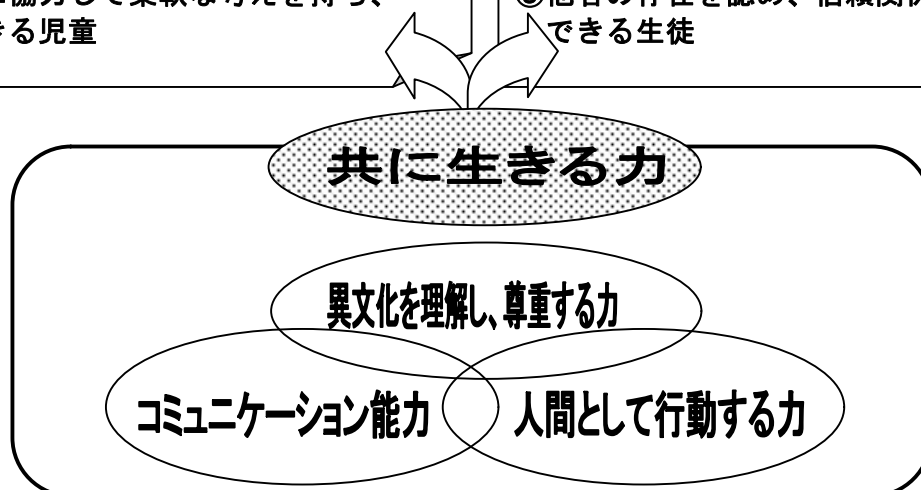
2. めざす児童・生徒像

(小学校)

- ①お互いのよさを認め合うことのできる児童
- ②自分の考えを表現できる児童
- ③お互いに協力して柔軟な考えを持ち、行動できる児童

(中学校)

- ①文化の違いを理解し、相手を尊重できる生徒
- ②自分の考えを表現し、意思を通い合わせることができる生徒
- ③他者の存在を認め、信頼関係を築き、行動できる生徒



＜小学校＞

①お互いのよさを認め合うことのできる児童

子どもたち一人ひとりにはそれぞれが違いを持ちながら、それぞれのよさを持っている。偏見やステレオタイプにとらわれずに、その子の良さを発見し、認めることで自分の良さも認められ、お互いを高めあうことができると考える。具体的には、学校の中には障がいを持つ子どもも含めて、様々な子どもたちが生活している。子どもたちはその中で、お互いの様々な関わりを積み重ねることで偏見を持つことなく、自然な気持ちで交流できるようになることが大切である。そして、お互いのよさを認め合うことは、さらに広い範囲での地域や他国の人々のよさを認め合うことにつながっていくものとする。

②自分の考えを表現できる児童

互いに協力して、共通の問題を解決していくためには、まず自分の考えを持つこと、そして、それを自分で表現することが必要である。表現することで初めて他人との共通点、相違点、そしてその理由が分かり、自分なりの考えの長短も発見するのである。そして意見交換をすることで、お互いの考えを高めあい、共通の問題を解決することにつながる。

③互いに協力して柔軟な考えを持ち、行動できる児童

世界がひとつのシステムとすれば、学級も互いに学び合い、高め合うシステムのひとつと言える。自分さえ良ければ良いという考えが横行する学級では、力の強い者、ずるい者だけが得をする学級になるであろう。我々は、民主的な支持的風土のある学級を築かねばならない。つまり、個人が全体を支え、全体は個人を支える土壌を創ることである。そこでは、互いに協力して共通の問題を解決できる能力を養うことができる。

＜中学校＞

①文化の違いを理解し、相手を尊重できる生徒

異文化を理解するには、まず自国の文化についての理解がなければ違いを見つけることも、共通性を見つけることもできないであろうし、良さを見つけることもできない。

自国の歴史や文化に対する誇りや愛情があって初めて他国の歴史や文化を理解し、尊重する態度を育成することができると考える。

そこで、日本の歴史や文化の学習においても、体験的な活動を取り入れた問題解決学習に取り組むことが大切である。

②自分の考えを表現し、意思を通い合わせることのできる生徒

国際化・高度情報化社会の中であって、我々の生活のあらゆるところに「外国」が入り込んでいる。このような社会においては、「外国は日常である」「違いがあるのは自然である」といった認識が必要である。その中では明の部分があれば陰の部分もあり、様々なトラブルも十分予想される。

我々が育てなければならないのは、その中でおごらず、おもねることもなく、粘り強く相手と意思の疎通を図り、問題を解決していこうとする人間である。学校生活の様々な場面を通じて、個々の生徒が必要に応じて自分の考えを表現し、お互いの意思を通わせている機会を多く設定することが大切である。

③他者の存在を認め、信頼関係を築き、行動できる生徒

今の中学生は(大都市圏では小学生のときから)受験戦争や競争社会の荒波にもまれている状態である。また、コンピュータゲームの流行によって個で遊ぶことが多くなっており、人と人を結びつける人間関係の結びつきが希薄になってきている。携帯電話の急速な普及によって、さまざまなトラブル等も多く見受けられる。これらのことは憂慮すべきことである。

そこで、様々な体験的活動や学習を通して、人と人との関わりを積み重ね、お互いに協力する活動をきっかけにしながら、信頼関係を築き、人間理解をより深めることのできる生徒を育成することが大切である。

3. 研究の仮説について

仮説 1

自ら地球にひらき、地球や世界とつながりのある身近な素材を教材化することによって、子どもの興味・関心を高め、地球的な視野で考える子どもを育成することができる。

今日、国際化が進展する中では、日本人は自ら地球にひらき、地球や世界とつなぐ力として、広い視野で異文化を理解し、異なる文化や習慣を持つ人々と偏見を持たずに、自然に交流できる資質が必要とされている。そのような資質を持たせるために、世界とつながりのある身近な問題(素材)を教材化し、その中で児童・生徒自らが、主体的に考えを深めことで、地球的な視野で考えていける力が育成されることが考える。

仮説 2

コミュニケーション(伝え合うこと)を重視した学習や問題解決的な学習を取り入れることにより、自ら考え表現する意欲が高まり、共に生きる力を育成することができる。

外国の人たちに限らず、人間はそれぞれが違いを持っている。違いを持つ人たちが共に学び、互いの良さを共感し、そのような交流を積み重ねるために、それぞれに人は互いに発信し、「交流しようとする」ことが大切である。コミュニケーション能力を養いながら自分の考えを相手に伝え、さらに理解することによって共に生きていこうという意識を培うことができる。

また、問題解決的な学習を重視することによって、「学習したことを生活の中で実行していくための実践力が養われていく」と考える。

4. 研究の視点

視点 1 世界に目を開く教材化の工夫

視点 2 コミュニケーション能力の育成

※視点 1 について

世界に目を開く教材化の工夫

世界に目を開くとは、単に文化や習慣の違いを知識として知るだけではなく、それぞれの文化の中に内在する価値や良さを探る態度と考える。そのためにはまず、自分たちの足元である郷土の良さをしっかりと理解し、そこから世界へ視野を広めていくことが大切である。

教材化にあたっては、地域や学校、児童生徒の実態を把握し、その題材でどんな力を子どもたちにつけたいのかを明確にする必要がある。互いの考えを理解し、協力しながら問題解決にあたることができるという観点で、教材化の工夫を考えていくことが大切である。

手だて 1

身近な素材から世界へ視野を広げる教材化

国際理解というと、すぐに外国のものを持ってくる傾向がありがちである。そのような手だても考えられるが、自分の足元から世界に広げるために、教材化の工夫にあたっては、まず自分たちの身近な生活に根ざしたところに目を向けていくことが必要である。

手だて 2

行動化をめざす単元構成と授業展開

「手だて 1」にともなって子どもが、『身近な生活の中で、今の自分にできることは何かを考え、実践していける』という「行動化」につなげていくためには、「どのような単元で、どのような授業を展開すればいいのか」を考えていくことが必要である。

また、その場合には、発達段階に合わせた具体的な授業展開が求められる。

※視点 2 について

コミュニケーション能力の育成

問題解決的な学習に取り組むときに、子どもたちは自分で考え、自分の判断をもちながらよりよく問題を解決していくことが大切である。自ら考え、自らの判断をもつとき、子どもたちは自ずと異なる考えや判断をもつことになる。それらの考えが交流されるときに、コミュニケーション能力が必要となる。お互いの考えの良さに気づき、自分の考えを互いに高める過程で、コミュニケーション能力とともに、共生の意識が培われると考える。

手だて 1

自ら考え、表現する力を高める指導法の工夫

子どもたちの興味・関心に基づいて授業を組み立て、子どもが身近な素材の中に問題を発見できるようにすることは、学習を子どもの主体的な学びにするための大切な要件であると考えられる。その学習の過程では、情報の集め方や調べ方、まとめ方など学び方を身につけさせながら、個別にじっくりと課題解決に取り組ませることが大切である。子どもたち一人ひとりが自分の考えを持つことができ、初めて自ら表現したいという意欲が出てくる。「表現したい」と思いたくなるような素材の教材化が大切になるであろう。

手だて 2

外国語に触れ、親しむ機会の工夫

国際化が急速に進展し、国際感覚を身につけるには外国語に触れたり、外国の生活や文化など

に慣れ親しんだりするなど体験的な学習が行われることが大切である。そのためには、ALTを活用したり、国際理解教育関係団体や地域に居住する外国の方との交流、また、インターネット等を利用した交流などが考えられる。

小学校では担任が関わっていく場面も大切にしながら、ゲームや歌を通して楽しく英語に親しむ活動やALTから生きた英語を聞いたり、英語を使う機会を設けること。また、中学校では英語で実践的なコミュニケーション能力を育てる活動や時事問題について話し合う場面を設定したい。

5. 研究推進の方向性

ポイント1 『授業の目標』の押さえを明確にする

まず、第一に大切なことは、教科・特活・道徳・総合的な学習の時間の授業としての目標を明確に押さえ、その目標達成のための評価を行うことである。

そして、今大会研究内容としての『国際理解教育のフィルターを通して見たとき・・・』の国際理解教育の目標の達成や評価が二義的に求められる。

このことを、しっかりとおさえた大会とし、授業を構築していく。

ポイント2 『主体的な学習活動』を位置づける

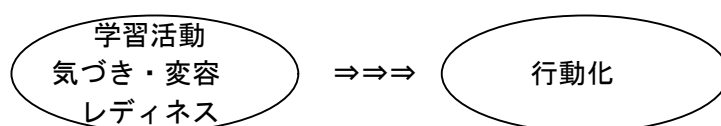
「身近な素材」＝「子どもが生きて活動する場にある素材」を利用し、そこに自分たちが今までに学習した内容や方法を使って「やれそうだ」「やってみたい」と主体的に追求活動をさせることで、その価値をさらにあげることができる。「自分」と「世界」がつながっていることを実感させることができるような素材を工夫し、それを『主体的な学習活動』として行うことで、子どもの興味・関心を高め、それが『問題解決的な学習』『体験的な学習』『表現活動』などの形を通して、子ども『行動化』につながっていく、と考えている。

ポイント3 『行動化』の視点を大切にする

以下の『行動化』についての考え方・視点を大事にしながら、児童・生徒の『変化』を見取るような授業を作っていく。

行動化について

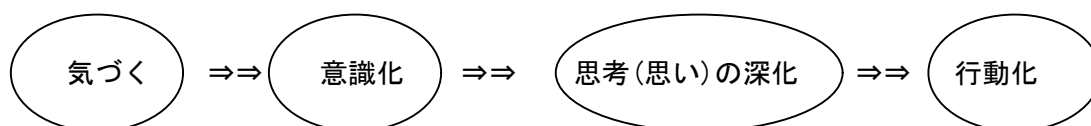
(平成18年度研究より)



「自ら課題を解決しようとする態度」が、子どもが感じる自分の身近の問題や地球上で起こっている問題について、関心を持ち、『行動』していこうとする態度を表す。

『行動化』を学習の中での子どもの「気づき」「変容」としてとらえ、将来的に大きなスパンで考えた場合の「レディネス」的なものとも考えることもできる。

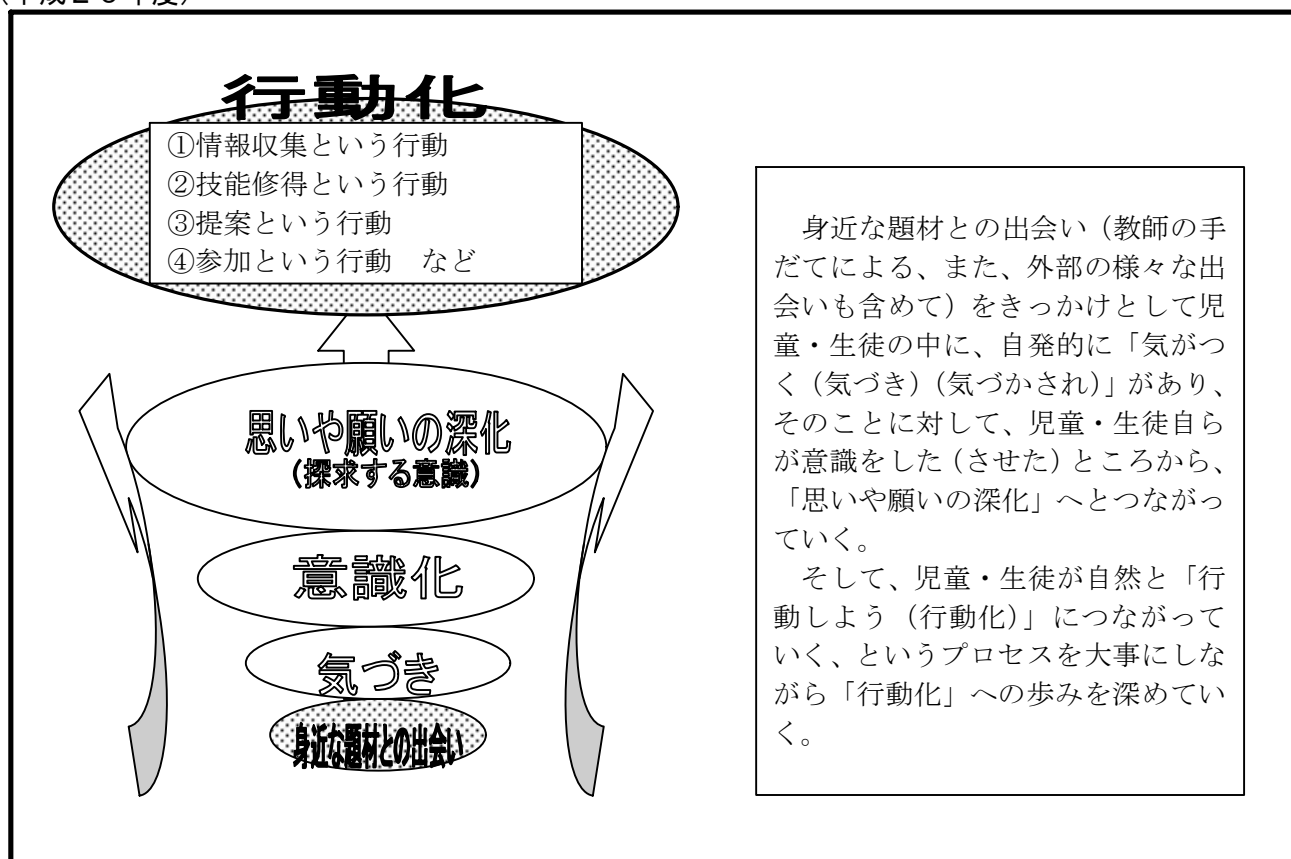
(平成19年度研究より)



「行動化にいたるまでの過程を大事にする」

子どもが自らの問題として考えることが最終的に行動化につながる。そこで、自分や地域や自国が世界とつながっていることに気づく段階をとりわけ大事に扱っていく。

(平成20年度)



※以上のポイントをおさえて研究を進めていくために

手だて1 授業者説明打ち合わせ会にて確認

手だて2 授業サポート協力者(授業アドバイザー)の設定による授業作りを行い、明確な方向性を位置づけていく。

6. 総合的な学習の時間 学習指導案 (授業実践)

日 時 平成20年10月10日(金)
5校時(13:30~14:15)
児 童 岩見沢市立北真小学校
5年1組 33名
授業者 越山 真史

<国際理解教育に関して>

総合的な学習の時間では、体験的学習や問題解決的学習等を通して、主に『「主体的な判断力と創造的な態度・考え方」や「問題解決能力」を育て、自己の生き方を考えることができるようにする』ことがねらいとされている。本単元では、それらのねらいが達成できるよう、児童の興味関心(問い・思い・願い)を最大限に生かし、自主的かつ自発的な学習が促される学習展開に工夫を施すこととした。例えば、単元導入の切り口としては、児童の希望を尊重し、「世界で一番大きな授業〜ギネスに挑戦!」に取り組み、途上国の教育(学校)の実態に目を向けさせた。その後、学習環境の積極的活用や多くの人々との直接的な関わりの中から、現在の地球的規模の様々な問題を知り、「地球はつながっている。決して他人事ではない」こと、そして「今、同じ地球に住む人間として、自分は何をすべきか、何ができるのか」、課題意識と使命感を持って行動していくことの必要性に気づかせてきた。

また、国際理解教育としては、国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動できる人材を育成していくことが重要であるとされている。本単元では、地球市民の一員としての自覚を持ち、地球に住む人間の一人としての義務を理解し、小学生なりの責任を果たすことができるよう、行動化へつなげる単元の展開に心がけてきた。また、意欲化の手立てにも様々な工夫を凝らしてきた。例えば、著名人からの子どもたちへのメッセージを活用した授業を取り入れたり、外国人ボランティアと共に、地球を守るための具体的活動に取り組んだり……。このような学習を多く体験させ、その都度、自らの考えや意見を発信し合っていくことにより、子どもたちの「問い・思い・願い」は深化発展し、さらに充実した学習活動となっていくと考えてきた。最終的には、世界と関わる喜びを味わわずと共に、「自分にも地球のために貢献できた」という自信を身に付けさせ、将来にわたって、世界を意識しながら、様々な事に挑戦していくことができる逞しい人間に育てほしいという願いを持っている。

キーワード : 人との関わりから学ぶ「行動化」

1. 実践に関わる視点

視点1

世界に目を開く教材化の工夫

JICAやNPO、国際機関などの関係職員等をゲストティーチャーとして招聘したり、ワークショップや著名人からのメッセージ、ビデオ・写真集等を用いた学習を取り入れるなど、創意工夫溢れる授業を積極的に構築してきた。それらの取り組みによって、「自分」と「地球」とのつながりに関心を寄せ、地球的視野に立って課題意識を持って、意欲的かつ主体的に行動する力を培うことができると考えた。授業の中では、常に行動化を意識させる手立てを講じてきた。

評価の観点——地球的視野に立って課題意識を持ち、行動する

教室の友達や担任とだけではなく、地域や世界の様々な人々との直接的な関わりの中で、他者と対話しながら、現在の地球的規模の問題を解決する方法を考え、自分の意見等を発信していく学習活動を多く設定してきた。特に、児童の「問い・思い・願い」を大切にした授業の構築に心がけてきた。

評価の観点——他者との関わりの中で、自分の「問い・思い・願い」を深め、発信する

2. 単元名

『国境なき こし団』

～地球のために「問い・思い・願い」を持って、やさしく行動する5年生～

(1) 児童の実態

生活面～4から5月の頃は消極的で幼い児童が多く、授業中は声が小さく、挙手の数もとても少ない学級集団であった。そこで、あえて直接的に体験する場を多く設定し、目標や夢を持って努力することの大切さを指導してきた結果、徐々に自信を持ち始め、年度末には、失敗を恐れず、積極的に発表したり行動したりする児童が増えた。給食についても、とても多くの残食があったが、途上国の子どもたちを意識するようになってからは、少しずつその量が減ってきた。

総合的な学習の時間～学習の各段階を経て、目的意識や問題意識を持って学習する必要性を徐々に理解してきた。特に、体験学習や探究学習に親しみ、興味関心を持って、問題解決に意欲的に取り組む児童が多かった。その結果、充実感や満足感を味わい、様々な事象に対して自分なりの考えを持つことができるようになってきた。

国際理解教育～「年度当初、子どもたちは、現在の地球上の問題には全く興味がなかった」と言っても過言ではない。若干の児童が、「『地球温暖化』という言葉聞いたことがある」程度だった。導入時は、地球の現状を知るたびに、「かわいそうだ。」「びっくりした。」などの単純な感想や意見が多かったが、学習を展開していく中で、子どもたちの危機感が彼らの心を動かし、エコ活動に積極的に取り組み始めた。年度末には、学習の度に、「自分が、地球のために何かをしたい。」「途上国の子どもたちのために、力になりたい。」「将来、国際協力の仕事をしたい。」「世界が平和になってほしい。」などの前向きかつ意欲的な意見が出されるようになった。学級内では、リングプルやペットボトルの蓋、割り箸の収集活動なども自然発生的に行われてきた。また、「教科書にのっていないアフリカ（札幌市）」、「国際ミニフェスティバル（岩見沢市）」、「サハリンからの訪問団との交流会（札幌市）」、「絵本『もったいないばあさん』の作者のトークショー（札幌市）」、「円山動物園による『絶滅危惧動物に関する講演会』（札幌市）」、「カンボジア・デイ in 札幌（札幌市）」など、校外での国際的なイベントにも興味を持ち、多くの児童が自主的に参加してきた状況にある。（平成21年夏、9名の児童が「サハリン北海道友好の船」の団員として、ロシア共和国サハリン州を訪問し、交流事業に参加）

(2) 素材の工夫

年間110時間の総合的な学習の時間の内、学級裁量70時間の全ての時間を国際理解教育の学習に充て、児童の様々な力を伸長させる取り組みを行ってきた。まず、世界的に同日に実施された「世界で一番大きな授業」に参加し、ギネスに挑戦。その後、「世界がもし100人の村だったら」「児童労働」の参加型ワークショップ、日本人のみならず、「北海道北真小サミット（8か国12名）」「JICA研修員（6か国8名）との対話」などの外国人との交流、「貴重な水」をテーマとした「宿泊学習」など、意欲を喚起する「人との関わり」を重視した横断的な学習に多く取り組み、楽しみながら学ばせる中で、児童自らが主体的に問題解決に向かって行動することの大切さに気づかせてきた。また、世界の社会事象に目を向けさせる目的として、帰りの会等において、新聞記事を元にした発表会を設定し、毎日取り組んできた。

(3) 学習の形態・方法

＜①知る・気づく・感じる・理解する・発見する＞→＜②疑問を持つ・不思議に思う・予想する＞→＜③考える・計画する・知恵を出し合う＞→＜④行動する・実践する・探究する・発信する・参加する＞→＜①知る・気づく・感じる・理解する・発見する＞→・・・という学習過程を『知サイクル（ちさいくる）』と銘打ち、児童の「問い・思い・願い」を重視する学習を展開してきた。

(4) 期待する子どもの意識・行動

「人との関わり」を中心とした様々な学習活動から得た「地球的規模の問題」に関する知識や疑問、そして「地球市民」としての自覚、「地球のために何かをしたい。何かをしなければ。」という義務感や使命感、個々の価値観をもとに、まずは第一段階として、児童自身が考えた、「『地球環境を守る』身近なエコ活動」に個人レベルで取り組んできた。その経験とゲストティーチャーからのアドバイス等により、第二段階の発展的学習として、グループでの活動である「同じ地球に住んでいる仲間として、途上国の人達のために、自分達ができること、すべきこと」に取り組んできた。これらの多くの学びや体験から、地球の問題に隠された世界的規模の背景や原因、解決法などを考え、将来にわたって、地球市民の一員としての自覚を持って行動していこうとする逞しい心が育つことを期待している。

3. 単元の目標

目標の観点	目 標
学習に対して主体的に取り組む力	現在の地球的規模の問題に対して課題意識や目的意識を持ち、意欲的かつ主体的に問題を解決しようとすることができる。
自らの課題を発見する力	現在の地球的規模の問題を解決するための、自分なりの課題を見つけ、よりよい方法を考えることができる。
他の人と関わり、行動する力	現在の地球的規模の問題を解決するために、他者とコミュニケーションをとり合い、行動することができる。
自己の生き方を考える力	現在の地球的規模の問題を知り、自己の生き方を考えることができる。

4. 単元の指導計画（70時間） ★は、ゲストティーチャー招聘の授業

過 程	学 習 計 画	時 間	学 習 活 動 児童の 「問い・思い・願い」	観 点 別 評 価				評 価 方 法
				学習に対 して主体 的に取り 組む力	自らの課 題を発見 する力	他の人と 関わり、 行動する 力	ものの見 方や考え 方	

◆Step1・・・「知る・気づく・感じる・発見する・疑問や課題意識を持つ」

課 題 発 見 ①	1 「途上国の教育の実態」（世界一大きな授業～ギネスに挑戦！に参加）	1	今の世界には、学校に行きたくても行けない子どもがたくさんいる。知らなかった。びっくり。かわいそう。もっと知りたい。	◎	○			感想文
	2 「現在の地球の主な10の問題」（絵本作家「真珠まりこさん」からのメッセージ）	2	今の地球には、他にもたくさん問題がある。大変だ。びっくり。心配。なぜ？ 未来の地球は、どうなるの？	○	◎			自己評価
	3 上記2の学習から① 「世界がもし100人の村だったら」（ワークショップ）	2	途上国に生まれなくて良かった。お金がたくさんある方がいい。食べる物や飲み水がたくさんあって、私達は幸せだ。	◎	◎	○		ワークシート
	4 上記2の学習から② 「アンゴラの少年兵・シエラレオネの学校に行けない少女・カンボジアの水上生活・NHKデータマップ（地球温暖化）他」（ビデオ視聴） 「イラク戦争・東京大空襲・広島原爆 他」（写真集等）	5	こんな国があるなんて知らなかった。学校に行けないなんて、信じられない。かわいそう。びっくり。なぜ貧しいのか？ 戦争は怖い。人間はなぜ戦争をするのか？ 日本は平和だ。日本に生まれて良かった。人間のせいで、地球温暖化が進んでいる。地球温暖化を防ぎたい。もっと地球のことを勉強したい。知りたい。調べたい。	○	◎			観察 ワークシート

課題発見①	5 上記2の学習から③ 「児童労働」(ワークショップ～★北海道開発教育ネットワーク会員)	2	子どもが働かされるなんて信じられない。助けてあげたい。どうしたらいいのか？お客さんが来ての授業はおもしろい。このような学習を続けたい。	○	◎	◎		ワークシート
	6 上記2の学習から④ 「ストリートチルドレン」(講演～★JICA札幌職員)	2	こんな子どもが外国にいてなんて。なぜ大人は助けないのか？助けてあげたい。日本は、何をしてあげているのか？	○	◎	◎		感想文
	7 「JICAって？」「国境なき医師団って？」(講演～★JICA札幌職員・資料)	1	知らなかった。JICAや国境なき医師団って、立派だ。他の団体もあるよ。青年海外協力隊になって助けてあげたい。	◎				観察
	8 上記2の学習から⑤ 「食料自給率」(食育～★岩見沢市栄養教諭)	1	日本がこんなに外国に頼っているなんて、知らなかった。もし輸入が止まったら、どうなるのだろう。食べ残しを減らしたい。	○	◎	○		ワークシート
	9 上記2の学習から⑥ 「世界の水事情」(資料～宿泊学習に向けて)	2	きれいな水が飲めることを感謝しなければならぬ。途上国は大変。大切な水を意識した2日間を過ごそう。これからも節水を続けたい。全校に水の大切さを伝えたい。	○	◎		◎	ワークシート

◆Step 2・・・「自己の課題を設定し、課題解決のための計画を立てる」

課題追究①	10 「北海道北真小サミット～地球の環境問題を考える」(★外国人ボランティアとともに学習)	5	「地球を守るための活動」について、外国人と考える。自分達ができることは何か、温暖化を防ぎたい。植樹をしよう。	○	◎	◎	◎	観察
	11 「地球環境を守るための探究活動」(調べ学習と発表)	4	自分達の生活に無関係ではない。地球はつながっている。調べて発表しよう。	◎	○			発表物
	12 「地球環境を守るためのアクション」(個人レベルの活動計画)	1	今までの学習から、地球の環境を守るための3つのエコ活動を計画しよう。	○	◎		◎	計画表

◆Step 3・・・「自己の課題を追究し、発信する」

課題追究①	13 「地球環境を守るためのアクション」(計画にもとづいた行動)	夏季休業	夏休み中、自分が計画した3つのエコ活動に、毎日取り組み続けよう。	◎		◎		活動表
	14 「地球環境を守るためのアクション」(行動の振り返り)	3	夏休み中に自分が取り組んできたエコ活動を反省。今後も地球や途上国のことを考えながら、生活していきたい。エコ活動を続けたい。一日一日を大切に生きていきたい。	○	◎		◎	反省表 相互評価

◆Step 4・・・「課題を深める・新たな課題に気づく」

課題発見②	15 「北海道北真小サミットPART2～途上国を考える」(★JICA研修員とともに学習)	5	途上国から来た外国人に、「途上国の問題点」などを質問。途上国のことをもっと知りたい。国際協力活動を調べたい。	◎	◎	◎		観察 自己評価
	16 「途上国を救うPART1」(講演～★日本赤十字社職員)	2	国際協力活動というものがわかった。他の団体の話も聞きたい。赤十字社の活動を見習いたい。キャンペーンで広めたい。	○	◎	◎		感想文
	17 「途上国を救うPART2」(講演～★ユニセフカンボジア事務所元職員)	2	カンボジアの実態がわかった。ユニセフの活動をしたい。もっと知りたい。個人でできることは何かあるのだろうか？	○	◎	◎		感想文
	18 「途上国を救うPART3」(講演～★NPO「JHP学校をつくる会」国際ボランティア経験者)	2	カンボジアへ行って、ボランティアは立派だ。私達もカンボジアのために何かしたい。カンボジアの教師になりたい。	○	◎	◎		感想文

◆Step 5・・・「グループの課題を設定し、課題解決のための計画を立てる」

課題追究②	19 「カンボジア・プロジェクト」 (グループごとの活動計画) ～★外務省NGO相談員への相談	5	カンボジアの人達のために、私達ができることは何だろう。「集める」「交流する」「調べる」「伝える」の4つのテーマごとにグループで計画しよう。	○	◎	○	◎	観察 計画表
	20 「カンボジア・プロジェクト」 (発表～下記5「本時の学習」参照) ～★外務省NGO相談員の参加	5	カンボジアの人達のための活動計画を発表し、より良い活動を目指そう。	◎	○	◎		観察 自己評価

◆Step 6・・・「グループの課題を追究し、発信する」

課題追究②	21 「カンボジア・プロジェクト」 (計画にもとづいた行動)	17	グループごとの活動計画にもとづき、カンボジアの子ども達のための行動に取り組もう。4グループのそれぞれの活動。	◎		◎		観察 自己評価
	22 「カンボジア・プロジェクト」 (行動の振り返り)	1	自分達が行ってきた活動を反省し、発表しよう。どこが良くて、どこが良くなかったのか。その理由は何か。	○	◎			反省表 自己評価 相互評価

◆Step 7・・・「振り返り、確かめる・新たな課題を持つ」

まとめ	23 「1年間の学習を振り返って」 (反省、今後の目標、計画)	1	1年間の自分達の活動と反省をもとに、今後、自分ができることを考えよう。将来、世界のために役に立ちたい。協力隊になりたい。世界が平和になってほしい。	○			◎	アンケート 相互評価 作文
-----	------------------------------------	---	---	---	--	--	---	---------------------



「ユニセフカンボジア事務所元職員をお招きして」(上記17の取り組み)



「途上国からのJICA研修員との話し合い」(上記15の取り組み)

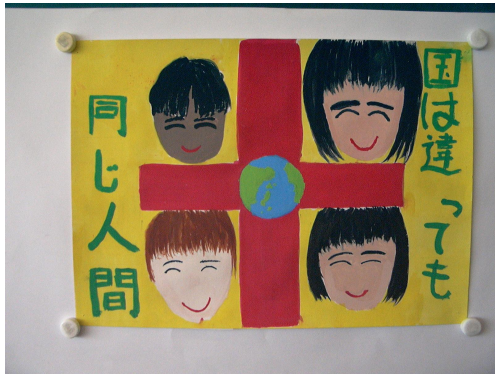
5. 本時の学習(上記20の授業)

(1) 本時の目標

目標の観点	目 標 (総合的な学習の時間)
学習に対して主体的に取り組む力	途上国の人々の実態に対して、課題意識や目的意識を持ち、問題解決のために、意欲的かつ主体的に取り組むことができる。
自らの課題を発見する力	問題を解決するためのグループが考えた計画について、課題に気づき、質問をしたり意見を述べたりすることができる。
他の人と関わり、行動する力	仲間やゲストティーチャーとコミュニケーションをとり、よりよい活動計画を練り合うことができる。
自己の生き方を考える力	

(2) 本時の展開

過程	児童の活動	教師のかかわり	評価・留意点
つかむ	・ 本時の学習を確認する	・ 本時のゲストティーチャーの紹介 「カンボジア プロジェクト」 同じ地球に住む仲間のために、 みんなで知恵を出し合い、よりよい活動をめざそう！ ・ 板書で確認させる	・ ゲストティーチャー（外務省NGO相談員）紹介 ・ 「地球はつながっている」「自分ごとと捉えて」 ・ ゲストティーチャーからの事前のアドバイスをふり返らせる
ひろげる	グループで考えた行動計画を発表しよう！ ＜発表者＞ ・ 「伝える」班が発表する ＜質問者＞ ・ 発表をしっかりと聞く 質問や意見を考えよう！ ＜発表者＞ ・ 各自で質問、意見を予想する ＜質問者＞ ・ 各自で質問、意見を考える 質問や意見を交流しよう！ ＜発表者＞ ・ 班内で、予想と回答を交流 ＜質問者＞ ・ 班内で、質問や意見の交流 ・ 学級内で質疑応答	・ 聞き手を意識した発表をさせる ・ 質問や意見を考えながら聞かせる ・ 発表者、質問者、それぞれの立場でしっかり考えさせる ・ ゲストティーチャーとともに、アドバイスして歩く ・ 低位の児童への支援を行う ・ 学級全体で、よりよい活動となるよう、話し合わせる ・ 相手の主張を理解しながら、交流させる ・ 助言、励まし、賞賛の言葉をかける	視点 1 ・ 質問カード等準備 視点 2 【主体的に取り組む力】 問題解決のために、意欲的かつ主体的に取り組んでいるか 【課題を発見する力】 課題に気づき、積極的に交流しているか ・ 「カンボジアの人達のためになるか」「自分達ができる活動か」「グループで長続きする活動か」前向きに話し合わせる ・ 児童の「問い」「思い」「願い」をできる限り尊重する
つなげる	計画を見直そう！ ＜発表者＞ ・ 質問や意見をもとに、ゲストティーチャーと相談しながら、計画を練り直し、再発表する ＜質問者＞ ・ 発表班に対するアドバイスをまとめる 専門家からまとめのアドバイスをいただく！ ・ 次時及び行動化へ意欲を持つ ・ カードに記入し、今日の学習をふり返る	・ さらによい活動を目指して、練り合わせる ・ ゲストティーチャーは、相談に対応する ・ その他の「問い」「思い」「願い」を文章で届けさせる ・ ゲストティーチャーからのアドバイスをもとに、意欲化へ繋げる ・ 本時のふり返りを行わせる	視点 2 【課題を発見する力】 課題に気づき、積極的に見直しているか 【他の人と関わる力】 コミュニケーションをとり、よりよい計画を練り合っているか 視点 1 【主体的に取り組む力】 行動化に向けて、意欲を持っているか ・ 自己評価カード等準備



「国際協力ポスターの作成」



「外務省NGO相談員をお招きして」
(上記20の取り組み)

6. Step 6における児童による主体的活動

※児童の興味関心・意欲にもとづき、話し合いを行った結果、4グループに分かれて、平成21年3月まで、カンボジアのための国際協力活動に主体的にとりくんだ。

★4つのテーマにおける班の活動（4グループが連携し合い、全てを関連させながら活動）

(1) 「調べる」・・・「カンボジアの歴史や実態などの調査活動、学級での発表会」

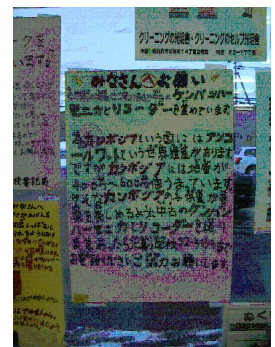
- ・児童A～テーマ「アンコールワット」
- ・児童B～テーマ「カンボジアのごみ山に住む人々」
- ・児童C～テーマ「カンボジアの歴史」
- ・児童D～テーマ「カンボジアの寺院」
- ・児童E～テーマ「カンボジアのお金」
「ストリートチルドレン」
- ・児童F～テーマ「カンボジアの祭り」
- ・児童G～テーマ「カンボジアの食べ物・スポーツ」
- ・児童H～テーマ「カンボジアの児童労働・地雷」
- ・児童I～テーマ「カンボジアでのボランティア活動」



「カンボジアについての学級発表会」

(2) 「伝える」・・・学校放送やポスター、チラシ等の活用、新聞やラジオ番組に出演等で「カンボジアの実態を多くの人々に伝え、国際協力の必要性を伝える活動」

(3) 「集める」・・・本校および地域や市内小学校等において、「募金や鍵盤ハーモニカとリコーダーの回収および清掃活動を行い、NPO団体である『JHP 学校をつくる会』を通して、カンボジアの子どもたちに寄贈する活動」



「学校近くの店舗内に
掲示されたポスター」



「中古のリコーダーや鍵盤ハーモニカの
回収および清掃活動」

(4) 「交流する」・・・「TV会議を通して、カンボジアの人達と直接交流をし、お互いを理解し合う活動」（下記7・8を参照）

7. カンボジアの小学生とのTV会議プログラム

13:30 (11:00)

交流開始・・・総合司会 越山より挨拶

13:33 (11:33)

児童による自己紹介

①北真小8名(名前)

→事前に配布済みのものに対する質問があればオッドー小より→北真小より回答

②オッドー小14名、教師5名、阪井→あれば北真小より質問→オッドー小より回答

13:45 (11:45)

それぞれの国や学校の紹介

① 北真小3名…5分

② オッドー小1名…5分

13:55 (11:55)

学級、グループの紹介

① 北真小4名…7分

② オッドー小1名…3分

14:05 (12:05)

音楽交流

① オッドー小(4曲くらい)6分

② 北真小(リコーダー合奏「サリーガーデン」)4分

14:15 (12:15)

図工作品交流

① 北真小3～4名(国際協力ポスター、工作、冬休みにおける作品)

② オッドー小(アートフラワー、アートフルーツ、たこ、折り紙など)

14:25 (12:25)

質疑応答

①北真小より質問(時間を見て、人数を決める)→オッドー小より回答

②オッドー小より質問(北真小の質問者と同じ人数)→北真小より回答

14:35 (12:35)

感想および挨拶

① 北真小代表児童1名

② オッドー小代表児童1名

14:40 (12:40)

担任挨拶・・・交流終了

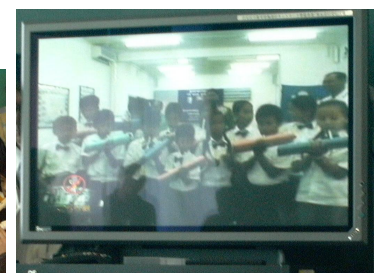
①阪井より ②越山より



「双方向TV会議システムによる直接交流」



「日本の紹介の中で、実物の雪を紹介」



「カンボジアからは日本の楽曲のプレゼント!」

「図工の作品や音楽の交流も」

8. TV会議後の子どもたちの主な「思い・願い」

- ①カンボジアの人達は、明るくて笑顔がいっぱいだった。ずっと笑顔のままでいてほしいと思った。世界中の人達に、カンボジアの人の笑顔を知ってほしい。日本人も笑顔でいっぱいになれば、心が豊かになると思う。みんな、やさしそうだった。
- ②音楽が上手で感動した。1年半前から始めたとは、信じられない。これからも音楽を楽しんでほしい。カンボジア中の学校で音楽の授業が始まってほしい。
- ③学校は二部制だけれど、これからも勉強をがんばってほしい。
- ④カンボジアの良さを、日本人に知ってほしい。カンボジアの人にも、日本の良さを知ってほしい。
- ⑤カンボジアに対するマイナスのイメージがなくなった。カンボジアにも良いところがたくさんあることがわかった。
- ⑥カンボジアの子どもたちは、頑張りやなんだと思った。私達も負けていけない。やる気を分けてほしい。
- ⑦私達の話をしっかり聞いてくれて、うれしかった。
- ⑧カンボジアに行って、一緒に遊んでみたい。同じ地球に住む人間として、これからも仲良くなりたい。交流を続けたい。
- ⑨私達が今、集めている「鍵盤ハーモニカやリコーダー」のことを喜んでくれたら嬉しい。私が楽器を使わなくなったら、寄付したい。
- ⑩カンボジアとのつながりを実感できた。
- ⑪カンボジアの人達は、恵まれないことはたくさんあるけれど、幸せなのかもしれないと思った。
- ⑫カンボジアも平和になってほしい。
- ⑬日本と変わらないことがたくさんあった。
- ⑭国（国境）がなんのためにあるのか、わからない。必要ない。
- ⑮大人になったら、カンボジアで農業をしたい。先生になりたい。
- ⑯とうもろこしの皮で花などを作って、器用だと思った。
- ⑰地雷を一個でも無くしたいから、もっともっとカンボジアのことを勉強したい。カンボジアに行って、カンボジアのことを色々を知りたい。
- ⑱これからも、お互いの良いところや悪いところを見つけ合いたい。



「カンボジアの小学生へ
リングプルやペットボトルの蓋の回収協力を
よびかけ」

9. その後の交流

- (1) 北真小学校「交流する」グループの児童が、カンボジアの児童へ手紙や写真などを送付。
- (2) カンボジアから「返信の手紙、空き缶のリングプル、図工の作品、TV会議時に北真小学校側が演奏したリコーダー演奏曲を練習して録音したテープなど」が届けられた。



「NPOより感謝状
授与」



「カンボジアから届いた手紙や贈り物に大喜び！」



「ユネスコ本部で掲示された
児童の作品」



「児童が回収した多くの

リングプル、ペットボトルの
蓋、割り箸」

10. ご協力いただいたゲストティーチャー（外部講師）など

氏 名	所属、職業など	内 容
真珠まりこ様	絵本「もったいないばあさん」 などの作家	「地球の10の問題」 メッセージ、トークショー
岡田佳子様	北海道開発教育ネットワーク会員	「児童労働」ワークショップ
佐藤さおり様	JICA札幌職員 （青年海外協力隊OG）	「ストリートチルドレン」 に関する講演
三好明子様	岩見沢市給食センター（市栄養教諭）	「食料自給率」授業
外国人ボラン ティアの方々	NICE日本国際ワークキャンペ ンター（8ヶ国12名）	「北海道北真小サミット」 環境保護学習会、交流、植樹など
JICA研修員の 方々	JICA札幌 （途上国からの研修員6ヶ国8名）	「北海道北真小サミット2」 交流、話し合いなど
上杉洋平様	日本赤十字社北海道支部職員	「赤十字の活動」などに関する講演
藤原幸恵様	日本ユニセフ協会北海道支部 （ユニセフカンボジア事務所元職員）	「ユニセフの活動」「カンボジアの 様子」などに関する講演
大塚乃理子様	NPO「JHP学校をつくる会」 会員（大学生）	「JHP学校をつくる会の活動」「カ ンボジアにおける国際協力活動の様 子」などに関する講演
池田誠様	外務省NGO相談員 （北海道国際交流センター）	「国際協力活動」に関する相談
滝沢靖六様	在札幌カンボジア王国名誉領事	メッセージ
平島美紀江様	北海道子連れプロジェクト代表	取材、情報提供など
石井潔様	JICA札幌職員	国際協力活動に関する児童からの 相談対応など
村松良介様 中原宏和様	NPO「とんでけ！車いすの会」 会員（大学生）	通訳ボランティアなど
阪井園子様	青年海外協力隊員カンボジア派遣 （JICAカンボジア）	TV会議交流指導者
カンボジア小学生	コンポンチャム州オドー小学校 音楽隊代表14名	TV会議交流対象児童
藤澤枝里子様 安斉圭亮様	FMはまなす NPO「JHP学校をつくる会」 会員（大学生）	取材など 中古のリコーダーと鍵盤ハーモニカ 清掃作業時の協力、感謝状授与
秋元 正嗣様	FMノースウェイブ	取材など
北海道新聞本社お よび岩見沢総局様	北海道新聞社	取材など



「JICA研修員と途上国を語る」
（上記15の取り組み）



「日赤職員をお招きして」
（上記16の取り組み）

1 1. 実践の成果

- (1) 途上国の人々の実態等、地球上の問題点に対して、課題意識や目的意識、そして児童なりの「問い・思い・願い」を持ち、問題解決のために、意欲的かつ主体的に取り組む活動により、何事にも積極的に取り組むようになった。
- (2) 地球市民の一員という自覚を持つことができ、国際交流や国際協力の重要性に気づき、実際に体験したり行動することができた。
- (3) 児童が抱いたそれぞれの世界観の中で、現在の地球的規模の様々な問題に対し、自分はどう生きていくべきか、自己の生き方を考えることができた。
- (4) 問題を解決するためのグループが考えた計画について、質問をしたり意見を述べるなどの活動を通し、様々な課題を発見する力が身に付いた。
- (5) 仲間やゲストティーチャーなどと積極的にコミュニケーションをとり、他の人と直接的に関わり合いながら学ぶ力が身に付いた。
- (6) 異なる文化や生活、歴史に対して、単に排除することなく、その存在を認め、違いを受け入れようとする心が育った。
- (7) 異なる文化と交流することにより、自文化に対する関心を持ち、見つめ直し、豊かなくらしや幸せとは何か、などということについて考えることができた。
- (8) 途上国の現状と先進国の歴史を学ぶ中で、自分達の恵まれた環境を自覚するとともに、「勉強する意義」について、考えさせることができた。
- (9) ニュースや新聞記事などを通して、世界の出来事に関心を持ち、私達のくらしは外国と結びついており、日本だけでは生活していけないことに気付くことができた。
- (10) ストリートチルドレンや児童労働の学習を通して、それらの人々の立場や気持ちを理解し、人権に対して関心を持つことができた。
- (11) 地球上の自然破壊や絶滅危惧生物の現状について学ぶことにより、限りある自然環境や命を大切にしようという気持ちが強くなってきた。
- (12) 戦争や紛争の歴史や現状を学ぶ中で、平和の尊さについて考えさせることができた。
- (13) 日本の食料自給率の問題や途上国の飢餓の問題を結びつけて考えることによって、世界的な原因やその影に潜む背景に関心を持ち、食料や水の大切さに気付くことができ、節水をしたり食べ残しを減らすことを心掛けるようになった。
- (14) 民主主義や平等が尊重される社会の素晴らしさに気付くことができた。
- (15) 様々な問題点に対し、自分なりの考えを作文や発表会等で、しっかり表現することができるようになってきた。
- (16) 「自分は世界のために役に立つことができた」という自信を持つことができ、様々な事に挑戦していく逞しさが徐々に育ってきた。
- (17) 先進国である日本にも多くの問題が存在することに気づき、原因を考えることができた。



「学芸会では、日本の文化 和太鼓にも挑戦！」